
大学政府 第一章 第一節

HiraRen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大学政府 第一章 第一節

【Nコード】

N0293BA

【作者名】

H i r a R e n

【あらすじ】

日本有数のマンモス大学に入学した津川悠太。彼を待っていた春先のイベントは生まれて初めての異性からの告白だった。

大学生活が華々しくはじまり、希望に満ち溢れた四年間が始まる……。
そう確信していた……。

他サイトとの重複投稿を行っております。

大学政府

第一章 心理学研究会！

第一節 こくはく。

「好きですッ、付き合ってください！」

あっ、春が来たんだ。

「えっと、、、へ、返事ってごじつ」

「へっ、返事……今度でもいいからっ。あの、待ってるから！」

走り去る彼女。

散り行く桜。春の匂い。

大学に入ってすぐのこと。広い校舎を繋ぐ外廊下を、彼女は走り去ってゆく。

そして悠太>ゆうたくの手にはメールアドレスが書かれた封筒が握られている。中には手紙が入っていると彼女は言っていた。ラブレターだ。そして、宛名は 悠太。

「大学生って……さいつつつこうつ」

告白を受けた。すぐにでも承諾したい告白だ。相手は可愛い女の子で、名前はまだ知らない。一目惚れだと相手は言っていた。

年齢〃彼女居ない歴の悠太にとって（女性に大変失礼だが）相手が異性であり、相当なクリーチャーでない限り、告白を断る理由はない。それに悠太の人生の中で相当なクリーチャーと呼べる異性は一度も出会ったことはない。

よく「あいつブサイクじゃね？」と話す声を聞くことはあるが、良くみれば全然ブサイクではない。むしろ、彼女がブサイクならおまえを含めた男の大半は壊滅的だぞ、と言い返したくなるときがある。

とにもかくにも、女の子からの告白を断る理由は悠太個人にはない。だから、付き合ってください、に対して、もちろんです！と答えたかった。

大学生として素晴らしいスタートダッシュを切りたかったから。そう、もちろんです！と答えたかった。

答えたかったのだが……。

「これより、心理研・第三八六回、御前会議を開催する」

前簾の手前側で四年生の先輩が声を張った。天蓋から伸びる薄い前簾の向こう側には、鎮座する『陛下』の姿がある。彼の実名を悠太は知らない。彼はみんなから『陛下』と呼ばれている。そして、今年で六回目の大学四年生をやっているということらしい。

部室の最も奥まった場所に設置された玉座は、今日も肅々とした雰囲気で『陛下』を包んでいた。

先ほど開催を宣言した『宮内大臣』の与田先輩が一同を介し、鋭い目つきをする。

「人数が少ないが、東間厚生大臣、説明したまえ！」

玉座から伸びる赤いカーペット（ニトリで購入）に沿う形で頭を下げている諸先輩方の一人 三年生の東間が顔をあげ「はっ！」と声を返す。

「報告致します！ 溝口経済産業大臣は本日就職活動のため江東区

へ。篠田文科省大臣政務官はインフルエンザの為に欠席であります！ また、飯野財務副大臣は高崎ゼミナールのために本日は欠席との届けが出ております！」

「なんたることだ。今日は御前会議であるぞ！ 陛下がお見えである！」

宮内大臣の叱咤が飛ぶ。これでは何のためにおまえを厚生労働大臣に任命しているのか意味がわからない、と彼は喚いた。

入部したての悠太は最近になってやっと慣れ始めたのだが、この状況を初めて体感する者は困惑するであろうから、ここで改めて断っておく。

ここは大学の部室であって、公的な意図はまったくない。つまり、この人たちは大学生であって、心理学研究会の部員である。それをよく念頭に置いた状態で部室に入らなくては著しい混乱と困惑を招くかもしれない。

悠太がそんな事を頭の中で断っている間に、淡々と御前会議の定例報告が済まされてゆく。

まず厚生労働大臣による出欠席の確認。

続いて文部科学大臣による大学講義の代出席（欠席者を誤魔化す手法）の確認。

そして外務大臣の自治会、学生課、教務課との連絡報告。

それらが済んだあとに本日の本題が宮内大臣より発表される。

「このたび、新入部員の津川悠太の元に異性より交際の申し出があった！」

宮内大臣の発表に諸大臣はざわついた。

「まさか！」

「我が部で異性からの申し出が！？」

「なんたることだ……」

「予想外の出来事だな……」

大臣と言う肩書きを外せば、どいつもこいつも冴えない大学生だ。そんな大学生が口々にそんな事を言う。なんとも奇妙な空間である。

「改めて説明する必要もあるまい。本日はその申し出に対する承認をするか否かの決定を行いたい」

おおつ、と周囲から驚きの声があがる。

「反対だッ、反対だッ！」なんて声があちこちからあがる。

しばらく、なぜ反対なのか、という論争が巻き起こる。

その論争の間に、なぜ悠太がこんな面倒くさい部に入ってしまったかを説明しようと思う。普通に考えてこんな部に入る人間はいないだろう……。

悠太はこの春から日本国内でも有数のマンモス大学である『東京文政大学』に入学した。とてもありきたりな理由だが、ここの法学部は公務員試験合格者が多い。だからこの大学を選んだし、自分の学力レベルでもここが限界だった。早稲田や慶応といったところよりは劣るし、日本大学あたりと同等か少し劣るレベル……なのだろうか。

そんな大学に入って、友達もいない悠太の眼に止まったのは『心理学研究会へ！』の小さな手作りの広告チラシだった。サークルや部活動の募集掲示板に貼られていたそれは、とても綺麗な出来だった。

心理学に興味があつたわけではないが、その『心理学研究会へ！』と吹きだしを発しているキャラクターが最近のアニメキャラクターで、とても綺麗に描かれていたから思わず悠太は飛びついてしまったわけだ。

なんとも安直である。

そして部室へ行ってみると、そこは『心理学研究会』に名を借りて、麻雀やスパロボに興じている空間だった。部室の片隅では最新のエロゲに四名の男子が食いつき、本棚にはアニメ雑誌や漫画が、全自動の麻雀卓が常にじゃらじゃらと音を発している。

文化部の中で最も広い部室を持ち、部室が集まる建物 部室棟

の最上階を陣取り、東京文政大学で確固たる地位を築いている（らしい）心理学研究会は、その名を被ったオタクサークルだった。

もちろん、アニメファンである悠太にとってはそちらのほうが都合が良い。

ここでまた断っておきたいが、心理学研究会の所有するアニメや漫画、ゲームの情報はとてつもなく充実している。それ専用の部署（文部科学省、外務省、防衛省など）があり、それらの担当部署が円滑に情報を収集、また品物を購入するのだ。

新人生歓迎会（新歓）では、徹夜をしないと手に入らないと言われていた一万二千円の茨城限定のフィギュアを六体も持ってきたのだ。その行動力の広さと経済力の強さ、そしてなにより縦横無尽に張り巡らされた情報網に悠太はほれ込み、入部を決めた、というわけだ。

「くううつ……えええいつ！ 黙れ黙れえええいつツツ……！」
シビレを切らした与田宮内大臣は声を挙げた。

「えええいつ、おまえ達の意見はどれもこれもが安直すぎる！ なぜ口々に反対を唱えるのだッ、津川悠太の意志は！？ 意見は！？ それを聞かず、己の欲望と嫉妬心だけでこの議題に結論を出すつもりではないだろうな！？」

与田の言葉に悠太はハツとした。

そうなのだ。今日の議題は自分に関することだ。

「し、しかし……我々に恋愛などという……」

「女は裏切るけど、二次元の女の子は裏切らない！ リスクを、リスクを考えて……」

「一年のクセに彼女なんて生意気だぎゃー」

口々に先輩の政務官が騒ぎ出す。

与田は彼らを「そんなに喚くな。喚くと出世がないぞ」と釘を刺して黙らせた。

それから静かに天蓋から流れる前簾へ振り返り、御言葉を頂戴すべしと跪いた。その仕草に一同も頭を下げる。

「陛下ッ、臣民（部員）を豊かにする議案はご覧のように反対で議決されました。いかがなさいますか……!？」

「ごくり……と周囲が息を呑んだのが分かる。もちろん悠太も。

長い沈黙を置いてから、陛下は立ち上がる事無く、また指一本動かす事無く、誇り高き公家の いや、皇族のような声で答えた。

「うむう、うらやましい……」

公家口調の声に、一同は「おおおおっ！」と声を挙げる。奇妙な世界だ。

「でっ、では……!？」与田が顔を上げると、

「紹介お、してえ、ほしい」

これまた公家口調の陛下の御言葉。

素早く与野は悠太に振り返り、「おい、紹介できるのか。陛下に女性を紹介できるのか！」とすごい剣幕でまくし立てた。悠太はそんな確約など出来ないと答えたかったが、周囲の大臣達の目と与田の目、そして前簾の向こう側でほくそ笑む陛下の視線に耐え切れず、答えてしまった。

「でっ、出来ると………思います！」

その返答に陛下がわずかに顎を引いた。

そして。

「ノミ に行こう」

今晚の食事会開催が聖断された。

場所は決まってさくら水産なのだと言っ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0293ba/>

大学政府 第一章 第一節

2011年12月31日18時54分発行